

戦争の最も怖いことは、人を人でなくすること

終戦記念日を迎える8月は先の戦争に纏わるドキュメント番組が多く、毎年録画を含めできる限り見（HP「雑学 BN」のマスコミ等コメント関係（V）、2008.09.02.「戦争が持つ残酷さ、悲惨さ、等々を風化させないために」：参照）るように心懸け、今年もようやく録画分も見終えた。

家族にすら話せず心の奥にしまい込んでいた体験を、高齢（80才代、90才代）になり、自らの死が迫っていることもあり、「戦争の悲惨さ、残酷さの実態を次世代に語り伝えておきたい」と告白・証言するものが今年には特に多い感があり、次のような証言・語りが印象に残った。

南方の島で友軍の支援もなく、ジャングルの飢餓から人肉を口にした戦友の話をする元兵士。

満州で日本軍の撤退で現地に取り残されて共に逃避行する開拓団の婦女子が、途中で逃避行の足手まといになると幼い我が子を銃殺することを懇願されたが拒否すると、母子はコーリャン畑に入って行き後刻母親のみが帰ってきたことを話す当時15才の満蒙開拓青少年義勇軍の元少年兵。

酷寒のシベリア収容所で、帰国を願う一心からソ連軍兵士にへつらうために戦友の言動をソ連軍にチクリ合った苦い体験から、戦後も人を信じられずに生きてきたと語る元兵士。

日本軍により捕虜を斬首する等の残酷な現場を幾度となく目にし、そうした記憶を忘れようとしないと戦後を生きてこれなかったと語る慰問団の元女性芸人。

無念さの中で戦場で散った戦友の家系は戦友の死で途絶えたと思うと、自らは生き延びて子や孫が産まれても喜ばずに笑顔を忘れて戦後を生きてきたと語る元兵士。

当人がようやく重い口を開いて語る言葉だけでなく語る時の表情も加わる証言は、やはり文章の証言録を読むよりも心に迫るものがある。

数々の証言の方々は、異口同音に「戦争の最も怖いことは、人を人でなくすること」と語っていた。

ようやく勇気をもって告白・証言しているだけに、我々次世代の者はしっかりとその想いを受け止め、我々の次の世代に伝えていかななくてはならないと思うし、その為にもまず知ろうとする人としての心が必要な気がする。

それこそが、非情な、悲惨な、理不尽な、非条理な、異形な死を遂げた方々への追悼の意でもあろうと思う。